



Data

監督・脚本: パート・フレインドリ
ツチ

原案: スザンネ・ピア/アンダー
ス・トーマス・ジェンセン

出演: ジュリアン・ムーア/ミシェル・ウィリアムズ/ビリー・クラダップ/アビー・クイン

👁️👁️ みどころ

織田信長は女だった！“大奥”には女ではなく、美しい男たちを！そんな新説（珍説？）に基づく小説があるくらいだから、リメイクの手法では、男から女へ、女から男への変更は自由。スザンネ・ピア監督の名作『アフター・ウェディング』（06年）をそんな風にもリメイクすると？

“産みの母親” VS “育ての母親”をテーマにした作品は多いが、スザンネ版と同じストーリーで進んでいく本作では、必然的にそのテーマは先鋭化していく。そんな事態になれば、夫婦は離反、父と娘に続いて母と娘もバラバラ、そして新妻は“成田離婚”以上のスピードで離婚を決意！？

そんなハラハラドキドキの展開後、巨額の寄付金が質量ともにさらにアップされるから、アレレ……。そんな決断は一体なぜ？ネタバレ厳禁なルールの中、スザンネ版と共に本作の面白さをしっかり楽しみたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■リメイクあれこれ。主役を男から女へ！なるほど納得！■□■

織田信長は女だった！そんな新説（珍説？）で書かれた面白い小説が、佐藤賢一の『女信長』だったが、意外や意外、読んでみるとその説得力にビックリ！また、17世紀前半、若い男だけを襲う疫病が流行し、時の将軍徳川家光も死去。窮余の一策として、一人娘の千恵が「家光」になったものの、男性人口が減少する中、大奥に女ではなく、美しい男たちが集められた。そんな“男女逆転の発想”で“大奥”を描いた、よしながふみ原作の人気漫画『大奥』が、2021年2月26日発売のコミックス19巻で、約16年にわたる連載を終えることになったが、その説得力にもビックリ！

他方、『パラサイト 半地下の家族』（19年）（『シネマ46』14頁）が、ハリウッドでのリメイク決定！そんなニュースにもビックリだが、本作は私の大好きなデンマークの女性

監督、スザンネ・ピアの『アフター・ウェディング』(06年)、『シネマ16』63頁)のハリウッドでのリメイクだから、まずはそれに注目!ちなみに、吉永小百合と天海祐希が共演した『最高の人生の見つけ方』(19年)、『シネマ46』336頁)は、ハリウッド映画『最高の人生の見つけ方』(07年)、『シネマ20』329頁)のリメイクだったが、ハリウッド版の主演は、ジャック・ニコルソンとモーガン・フリーマンの2人のおじさん俳優だったはず。

それと同じように、『アフター・ウェディング』の導入部に登場した、インドの孤児たちの援助活動に従事する理想主義者も、結婚式のシークエンスに登場した大富豪も男だったはず。ところが、それをハリウッドがリメイクした本作冒頭に登場する、インドのカルカッタのスラム街で、孤児院の運営に人生のすべてを捧げている女性はイザベル(ミシェル・ウィリアムズ)。また、愛娘・グレイス(アビー・クイン)のウェディングに夫のオスカー(ビリー・クラダップ)と共に臨んでいるのは、22年前にゼロから起業し、今や全米一のメディア代理店のトップに立つ億万長者の女性、テレサ(ジュリアン・ムーア)だ。アレレ、こりゃどうなっているの?しかし、よく考えてみると、なるほど納得!

■□■ “産みの母親” vs “育ての母親” 問題が急浮上! ■□■

“産みの母親” vs “育ての母親” 問題をテーマにした名作の1つが、井上真央と永作博美が共演した『八日目の蟬』(11年)、『シネマ26』195頁)。近時の、『光をくれた人』(16年)、『シネマ40』239頁)も、『夕陽のあと』(19年)、『シネマ46』346頁)も、『朝が来る』(20年)、『シネマ47』118頁)も同じテーマの映画だったが、母性を前面に押し出したこれらの女(母親)たちの物語は、それぞれ奥が深い。それは、「妊娠は女の特権」という当たり前のことと密接に関係するからだ。そのため、そんなテーマの映画では、男の軽さと女の強さがどうしても際立ってしまう。

そんな視点から言うと、男2人の主演から女2人の主演にリメイクした本作では、“産みの母親” vs “育ての母親” 問題が急浮上することになる。しかし、それが本作の大きなテーマであることがわかるのは、既にスザンネ版を見てネタバレ情報を持っている観客に限られるから、スザンネ版を見ていない人は、本作導入部に見るテレサからイザベルへの多額の資金援助の申し入れや、それに付せられた“ある条件”の意味はまったく分からないはずだ。したがって、イザベルがインドからニューヨークに飛び、さらに、テレサの娘グレイスのウェディングに臨む一連のストーリーは、ミステリーだらけのはずだ。これは一体ナニ?テレサは一体何を狙っているの?

■□■ 新婦の父は?スピーチは?こんな面会ホントにあり? ■□■

彫刻家として大成功した父親オスカー、今や全米一のメディア代理店のトップに立つ億万長者の母親テレサの大切な娘グレイスの結婚式ともなれば、それが超豪華なのは当然。また、『ゴッドファーザー』(72年)第1部冒頭の超豪華な結婚式は、出席者は多くても黒社会の人々に限定されており、閉鎖的だが、グレイスの結婚式の参加者は当然オープンだ。それでも、出席者の名前は事前に管理されているはずだから、思いつきのようなテレサの

提案で、テレサたちのファミリーに縁もゆかりもないイザベルが突然出席することになる
本作導入部のストーリーはかなりヘンだ。

イザベルは、超高層ビルの広々としたテレサのオフィスで、さっさと寄付金に関わる契約の調印をし、週末にはインドに帰りたいと思っていた。にもかかわらず、インドで待っているわが子のような男の子ジェイに「もう少し待っていてね」と電話を入れ、週末には行きたくない結婚式に出席させられたから、ついイライラ。しかも、ビジネスのためのあの席で、テレサは結婚する自分の娘のことや結婚後に授かった双子の息子の話など、一方的に自分の身の上話ばかりを聞かせ、肝心の寄付の話は「もう少し精査させてほしい」と言うだけで未だ決定してくれなかったから、フラストレーションがたまっていたのは当然だ。イザベルのためにわざわざ用意されたドレスを着て、高いヒールを履いて駆けつけたのは仕方ないが、式への到着が少し遅れたのはそんなイライラのせいもあったのだろう。

そんなイザベルの目の前に飛び込んできたのは、新婦の肩を抱く父親の姿だが、アレレ、この顔は・・・？さらに、動揺するイザベルの耳に聞こえてきたグレイスのスピーチは、通り一遍のものではなく、異例の身の上話。そして、その内容は、「世界一素晴らしいお母さん」と讚えた母親が、産みの母親ではなく、育ての母親であることをユーモアたっぷりに語ったものだから、会場はやんやの喝采！しかし、突然そんな話を聞かされた“産みの母親”たる当の本人イザベルの気持ちは・・・？

■□■テレサはなぜ？そんな疑問の中、人間模様は大混乱に！■□■

新婦の父親の顔を見て驚いたのがイザベルなら、ガーデンパーティーの中で参列者から一人離れて立っているイザベルを見て驚いたのがオスカーだ。「どうして、私の娘があそこにいるの？」。それがイザベルの質問なら、「なぜ君がこの結婚式に参加しているの？」。それがオスカーの質問だ。もちろん、一人一人の観客も同じ疑問を持つはずだが、それ以上に疑問なのが、テレサはイザベルがグレイスの産みの母親であることを知ったうえで、強引にグレイスの結婚式にイザベルを参加させたのかどうか、ということ。もしそうだとしたら、それは何のため？他方、多額寄付の申し出はホント？ひょっとして、それはこのシナリオを実現させるための単なる方便？そんな疑問が次々と湧いてくる。

テレサ役を演じたジュリアン・ムーアは演技力豊かなベテラン女優だが、導入部でのテレサの振る舞いやお喋りに不自然な点や強引な点があったことは間違いない。しかし、テレサは自分が苦勞して産んだ実の息子たちと同じようにグレイスを愛していることは嘘ではないようだから、もし結婚式の直後に“産みの母親”VS“育ての母親”問題が浮上すれば、何よりもグレイスが迷惑することはわかっているはずだ。そして、もしそんな結果になれば、これまで築いてきたテレサの家の夫婦、親子の絆が一気に崩れてしまうはずだ。そんな心配が次々と浮かんでくる。そして、本作中盤ではイザベルとオスカーとの話し合いはもちろん、イザベルとテレサとの話し合い、イザベルとグレイスとの話し合い等のシークエンスが次々と登場してくるから、それに注目！その節目節目に、それぞれの立場の

男女の人間の感情の発露が観られるのも当然だから、本作ではそこに見られる人間模様をしっかりと観察したい。さらに、「成田離婚」(新婚旅行から帰ってすぐに離婚すること)以上に早い、グレイスからの「離婚したい」との気持ちも発露されるから、コトの影響は新婦にも及んでいくことに。

さあ、この人間模様の大混乱はどう収束していくの？そこで提示される問題は、これはすべてテレサの企み通りの展開？それとも？ということだが・・・。

■□■当初の寄付を上回る新提案は？その狙いは？背景は？■□■

スザンネ版では2人の主人公は男だったから、結婚式終了後、「俺の娘なのか？」という議論が登場していた。しかし、2人の主人公を女にしてリメイクした本作では、“産みの母親”VS“育ての母親”がテーマになってくるため、必然的にその議論は一切なくなっている。しかし、前述した疑問が次々と湧いてくるのは、スザンネ版も本作も同じだ。

私はスザンネ版で、論点その1～論点その5に分けて評論したから、興味がある人は是非それを参照しながら読んでもらいたい。その「論点5」は、巨額の寄付金の契約をめぐる攻防戦だったが、それは本作もまったく同じだ。「いろいろ考えたが・・・」と前置きしたうえで、テレサがイザベルに提示した新たな条件は、「1年ごとの寄付金ではなく、イザベルとグレイスの名前を付けた200万ドルの基金を設立し、2人で使い道を決めればいい」というものだったから、イザベルはビックリ！「これで私の財産がやっと減ったわ」とテレサはあっさりしたものだったし、これによってテレサが経営の第一線から退く決意であることも明らかだが、テレサがそこまで基金を膨らませた上、グレイスの冠までつけるのは一体何のため？また、その条件としてイザベルがニューヨークに住むことを義務付けたのは、一体何のため？それをしっかり考えたい。

■□■ネタバレ御免で、これだけは・・・■□■

本作最終盤には、本作最大の“ある秘密”が明かされるが、それもスザンネ版と同じだから、皆さんにはそこに至るスリリングな展開をしっかりと楽しんでもらいたい。ちなみに、スザンネ版の評論のラストでは「あっと驚く新事実が……」と題してネタバレさせているが、そんな結末は本作も同じであることを、ネタバレ御免で書いておきたい。

2021(令和3)年2月17日記